



语言学——理论与应用

日语语言学研究入门·考研必读系列（三）

刘笑明 刘 翥 主编

南开大学出版社

日语语言学研究入门·考研必读系列（三）

语言学——理论与应用

刘笑明 刘 勰 主编

南开大学出版社

天 津

图书在版编目(CIP)数据

语言学:理论与应用 / 刘笑明,刘勰主编. —天津:南开大学出版社,2013. 11

(日语语言学研究入门. 考研必读系列;3)

ISBN 978-7-310-04338-5

I. ①语… II. ①刘… ②刘… III. ①日语—语言学—研究生—入学考试—自学参考资料 IV. ①H36

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第242138号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人:孙克强

地址:天津市南开区卫津路94号 邮政编码:300071

营销部电话:(022)23508339 23500755

营销部传真:(022)23508542 邮购部电话:(022)23502200

*

天津市蓟县宏图印务有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2013年11月第1版 2013年11月第1次印刷

230×170毫米 16开本 29.75印张 534千字

定价:56.00元

如遇图书印装质量问题,请与本社营销部联系调换,电话:(022)23507125

語学シリーズ3

言語学——理論と応用

劉笑明 劉 羈 編著

執筆者（カナ順）：

白田泰如	遠藤智子	川上夏林
韓 濤	齋藤隼人	澤田 淳
白田理人	杉山さやか	中川奈津子
中田智也	中俣尚己	董 玉婷
楊 彩虹	横森大輔	劉 羈

南开大学出版社

天 津

前 言

随着我国日语学习与研究的发展,把日语语言学作为一个专业来研究的人员越来越多起来。本书正是为了大学日语专业本科高年级日语研究教学,以及为了考取中国以及日本的日语语言学专业硕士·博士研究生,进而从事日语语言学研究的人员而编写的一套语学研究入门丛书。

本丛书分别为:第一册《日语语言学——基础知识》、第二册《日语语言学和日语教育——研究与实践》、第三册《语言学——理论与应用》。其中,在第一册《日语语言学——基础知识》中,主要介绍有关日语语言学专业的基础知识、基本概念以及专业术语的解释。在第二册《日语语言学和日语教育——研究与实践》中,主要阐述有关日语语言学和日语教育的基本理论以及研究领域入门、研究范围、专业课题的探讨与实践等问题。在第三册《语言学——理论与应用》中,从单一的日语语言学研究扩展到语言学研究领域全貌,从语言学的视点阐述专业理论与应用问题。

本研究丛书具有以下三个特点:

首先,本丛书针对各种理论问题和语言现象,作了比较全面、深入的论述。用具体的事例说明其道理,对重要的词汇有详细的定义和用法解释。本丛书是一部完整的、系统的语言学研究入门书籍。既注重理论分析又阐述用法,使其学术性和实用性得到统一。

其次,本丛书还大量吸收了语言研究和教学方面的新成果,使内容更加充实、新颖,规范术语,明确概念,并对前人的研究业绩和研究史有一定的介绍,阐明在日语语言学研究中国今、内外、纵横的关系,对日语语言学有较深层次、较广范围的理解,对我国日语语言学教学与研究有着积极的推动作用。

再者,本丛书无论每一章都附有专业习题和参考解答以及参考文献。此书在编写过程中,借鉴和参考了相关各领域的重要著作及各种研究文献。为了有助于日语学习研究,以及加深对日语语言学术语的理解,书中文字为日文。

通过学习本套研究丛书,可以了解日语语言学的全貌,较为深入地掌握日语语言内部规律及语言运用相关的各种基础知识,提高日语理论研究水平和实际运用能力,并为进一步推动研究打下较为扎实的基础。全书的统一规划、设计、编辑、修改、校对由天津外国语大学教授刘笑明负责。在本册《语言学——

2 语言学—理论与应用

《理论与应用》中，各章的执笔者如下：

- 第1章 言語学とは（劉勰、京都大学博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC）
- 第2章 音声学（中川奈津子、京都大学博士課程）
- 第3章 音韻論（白田理人、京都大学博士課程）
- 第4章 形態論（齋藤隼人、京都大学博士課程）
- 第5章 統語論（川上夏林、京都大学博士課程）
- 第6章 意味論（杉山さやか、京都大学博士課程）
- 第7章 語用論（澤田淳、青山学院大学准教授）
- 第8章 社会言語学・方言学（臼田泰如、京都大学博士課程）
- 第9章 歴史・比較言語学（劉勰、京都大学博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC）
- 第10章 対照言語学（楊彩虹、立命館大学講師）
- 第11章 生成文法（中田智也、京都大学博士課程）
- 第12章 認知言語学（韓濤、名古屋大学博士課程）
- 第13章 コーパス言語学（中俣尚己、京都教育大学講師）
- 第14章 談話と文法（遠藤智子、京都大学・日本学術振興会特別研究員 PD）
- 第15章 会話分析（横森大輔、名古屋大学・日本学術振興会特別研究員 PD）
- 第16章 ことばの習得（董玉婷、京都大学博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC）

由于本丛书涉及范围、领域较广，主编和执笔者水平有限，难免有疏漏不当之处，恳请各位提出批评。

刘笑明 刘勰
2013 年早春

目 次

第一章	言語学とは	1
第二章	音声学	16
第三章	音韻論	45
第四章	形態論	81
第五章	統語論	96
第六章	意味論	123
第七章	語用論	152
第八章	社会言語学・方言学	215
第九章	歴史・比較言語学	243
第十章	対照言語学	256
第十一章	生成文法	286
第十二章	認知言語学	325
第十三章	コーパス言語学	371
第十四章	談話と文法	399
第十五章	会話分析	423
第十六章	ことばの習得	458

第一章 言語学とは

1. 言語と言語学

日頃、私たちの「ことば」は、情報を話し手から聞き手へと伝達するために用いられます。例えば、ある日、仕事帰りにばったり会った聞き手に、話し手が「最近忙什么呢?」と言った場合を想定してみましょう。この「文」には意味があります。「意味」という概念については、後の第6章を参照していただくとして、話し手と聞き手は間違いなく「文」によって「意味」を伝達しています。

このとき、話し手の口から出た「音声」が聞き手の耳に伝わり、その音によって、聞き手が話し手の意図を理解します。また、文字を使って意味を表す言語もあれば、文字を持たない言語も数多く存在するため、「意味」を表す手段としては「音声」が一般的です。

しかし、私たちは、人間の「ことば」とはどんなものなのか、という疑問を抱くことはほとんどないと言えます。簡単そうに見える質問ですが、答えるのが難しい問題です。そこで、言語学は、普段あまり意識されない人間の「ことば」、つまり「言語」の構造・傾向・歴史的な変化などを研究する学問です。

2. ソシュールの言語理論

この節では、「近代言語学の父」と呼ばれるスイスの言語学者、フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure) とその言語理論を紹介します。



図1 近代言語学の父：フェルディナン・ド・ソシュール（1857～1913）

1857年11月、ソシュールはスイスのジュネーブに生まれました。ソシュール家は16世紀にフランスから移住してきた名家で、物理学・生物学を中心に多くの学者を輩出してきました。1876年にパリ言語学会に入会し、10代にして数々の発表を行って名声を高めます。1878年に『インド・ヨーロッパ諸語における母音の原初体系に関する覚え書き』を出版し、1880年から、パリの高等研究院で研究と教育に従事した後、ジュネーブに戻り、ジュネーブ大学の教授となりました。死後、1916年に『一般言語学講義』が出版されました。この『一般言語学講義』はソシュールが書いたものではなく、1907年から1911年まで行われた一般言語学の講義内容をその弟子たちがまとめたものです。これによって、現代言語学という学問分野が確立されたと言えます。

2.1 通時態と共時態

ソシュールは言語を考察する際に、通時態と共時態、ラングとパロール、シニフィアンとシニフィエなどの二分法的な概念を提示しました。

ここでは、まず通時態と共時態について論じます。

あらゆる言語は時間軸に沿って変化します。通時態（diachrony）とは、言語のあり方を時間軸に沿って捉えた言語の状態で、通時言語学における史的变化を観察する際の対象となります。言語の変化は言語学の取り扱う重要な課題ですが、言語の変化、言い換えれば、通時態を明らかにするには、少なくとも2つ以上の時点における共時態を比較する必要があると考えられます。一方、共時態（synchrony）とは、ある言語のある特定時点における状態で、

共時言語学の対象となります。

2.2 ラングとパロール

ソシュールは、言語には、ラング (langue) とパロール (parole) という二つの側面があると提示しました。

ラングとは、ある言語共同体が共有する音声・語彙・文法規則の記号体系のことで、話者が共通に持っている当該言語に関する言語知識のことです。ラングは話者に共通する抽象的なものですが、これに対して、ある特定の場面で実際に使われる具体的なことばをパロールと呼びます。例えば、以下の二つの例を比較してみましょう。

(1) 中国の公用語は、中国語です。

(2) この手紙に書いてあるのは面白い中国語ですね。

(1) の場合は、中国語話者であれば誰もが共通に持っている中国語に関する言語知識を表しているため、「ラング」という意味で使っています。(2) の場合は、「この手紙」に限定した場面において、実際に使用された具体的な中国語ですから、「パロール」に当たります。

講義ではソシュールは、言語学の研究はパロールではなくラングを対象とすべきだと主張しました。

2.3 シニフィアンとシニフィエ

シニフィアン (signifier) とシニフィエ (signified) も、ソシュールによって定義された二分法的な概念です。もともと、シニフィアンとは、フランス語の動詞 *signifier* (意味する) の現在分詞の形を取り、「意味しているもの」を表します。シニフィエは同じ動詞の過去分詞の形を取っていて、「意味されているもの」を指します。日本語では、シニフィアンを「能記」または「記号表現」、シニフィエを「所記」または「記号内容」と訳すこともあります。

具体的な例を挙げると、シニフィアンとはことばのもつ聴覚的な側面のことで、「狗」という言葉の「狗」という文字と、「gǒu」という音声のことを指します。一方、シニフィエとは、シニフィアンによって意味されている「狗」というイメージや意味内容のことです (下図)。



図2 シニフィアン・シニフィエの関係

ソシュールは、表裏一体となったシニフィアンとシニフィエとの対のことを、「シーニュ」（フランス語では *signe*）、すなわち「記号」と呼んでいます。また、ソシュールは、このシニフィアンとシニフィエの結びつき方は、恣意的なものであるとしました。この「恣意性」という概念については、次の節で詳しく論じていきます。

2.4 恣意性と線状性

ソシュールは、人間の言語一般に見られる「恣意性 (*arbitrariness*)」「線状性 (*linearity*)」という2つの特徴を指摘しています。

言語記号の恣意性は、シニフィアンとシニフィエとの結びつきが恣意的であることを指します。つまり、記号表現と記号内容の間に結びつきの必然性がないということです。

例えば、犬という動物を表現する時に、中国語では「狗」、日本語では「犬」、英語では「dog」と言います。この3つの異なった単語が同じ動物を指します。ここから分かるのは、犬という動物を指す時に、必ずしも「いぬ」という音をこのように並べなければならないというわけではありません。たまたまそうなっているだけです。これは長い間を経て、定着しているにすぎないということです。

また、中国語では、足首から上の部分を「腿」といい、足首より下の部分を「脚」と言います。しかし、日本語の「あし」という単語はこの2つの部分をカバーしています。同じものを表現するのに、言語によってその分け方も変わってきます。これも言語記号の恣意性の一つの現れです。

しかし、恣意性に対して、有縁性（もしくは有契性）(*motivation*) という

概念が提唱されています。有縁性とは、いわゆる記号表現と記号内容との間に類似性が認められること、つまり、言語記号がある程度内容を反映していることを言います。

ソシュールによると、恣意性のほか、人間言語のもう1つの特徴は線状性です。線状性とは、単語は文を構成するのに、必ず一定の順序で並べなければならないということを指します。また、文を構成する単語は、その並び方はでたらめではありません。あらゆる言語は、単語の並び方には決まりがあります。このことを、文に構造 (structure) があると言います。

3. 分節と二重分節

言語学では、文 (sentence) が語 (word) に分けられることを分節 (articulation) されると言います。二重分節 (double articulation) という概念は、言語学の基本用語の一つで、フランスの構造主義言語学者アンドレ・マルティネ (André Martinet) によって提唱されました。アンドレ・マルティネは、言語が単に音声の羅列ではなく、二重の構造を有していると主張しました。つまり、文を最小の単位に分割しようとした場合、まず、文は意味を持つ部分である語や形態素 (morpheme) に分けられ (第一分節)、その形態素はさらに意味のない音素 (phoneme) に分割されます (第二分節)。

例えば、中国語の「火」という語は、語としてはこれ以上分解できませんが、音素としては /h/、/u/、/o/ という3つのものに分解されます。この二重分節こそ、言語の、有限の素材を使った無限の創造の基礎となっています。

4. 言語の類型

世界の諸言語は、その言語的特徴に基づいて分類されています。この分類を言語の類型と言います。19世紀のドイツの言語学者、アウグスト・シュライヒャー (August Schleicher) は、形態論上の分類、いわゆる孤立語・膠着語・屈折語という3類型を確立しました。

まず、孤立語 (isolating language) とは、名詞や動詞などが語形変化をせず、文法的な機能が「語順」によって表される言語のことです。中国語 (特に古典中国語)、チベット語、ビルマ語、ベトナム語、タイ語などが代表的な言語です。

次に、膠着語 (agglutinative language) とは、名詞や動詞などに接頭辞や接尾辞のような形態素を付着させることで、その単語の文中での文法関係を示す言語のことです。テンスやアスペクトなどの文法的な機能を果たす単語は動詞の後に置かれるのがその一例です。日本語、朝鮮語、フィンランド語などが代表的な言語です。

最後に、屈折語 (inflectional language) とは、名詞や動詞などが活用によって変化する言語のことです。同じ意味を表すのに、動詞の種類によって語形が異なるのが一般的です。ラテン語、ギリシア語、アラビア語など多くのヨーロッパ言語が屈折語に分類されます。

シュライヒャーは、言語が孤立語→膠着語→屈折語という順に進化してきたと考えていました。しかし、実際のところ、屈折語の多くが膠着語・孤立語などの特徴を併せ持っていると考えられています。また、現代のヨーロッパ言語では、屈折語的な特徴が徐々に失われ、孤立語的な性格が強まってきており、特に英語において顕著です。さらに、例えば、典型的な孤立語であった中国語が、現代において膠着語的な特徴を表すようになってきています。このため、シュライヒャーによる「言語の類型的な進化」は、実は間違っていると考えられます。

5. 現代言語学の研究分野

音声・単語・文法など、言語の様々な側面にわたって、言語学の様々な分野が設けられています。言語学という学問は、世間では「文系扱い」されているかもしれませんが、しかし、実は言語学はかなり幅の広い学問で、「文系」の性格を持っていない研究分野も多くあります。

例えば、「理論言語学 (生成文法や認知言語学を含む)」という研究分野は、自然科学の研究分野と同じように、人間言語の客観性や普遍性を求める科学的な分野です。また、人間の音声の物理的特徴を扱う音声学は、理系の研究分野の性格を持っています。さらに、コーパス言語学もその一例として挙げられます。コーパスとは、実際に使用された言語データがまとまったもののことで、最近では特に電子化された言語データのことを指します。これまでの言語研究では、言語学者が自らの頭で作った少数の用例をもとに、主観的な議論を続けてきました。これに対して、コーパス言語学は大量の用例に基づくので、より客観性の高い科学的な分野です。

その一方、言語学は「理系」という学問とは、学問の本質は違うところもあります。認識主体としてのヒトを重視するため、機械や計算には頼れず、人間を必要とする点において大きく異なります。

5.1 音声学と音韻論

本書では、多くの研究分野を収録しています。

まず、人間の音声の物理的な属性を扱う研究分野として、音声学(phonetics)が挙げられます。人間の発音器官によって、音声が発せられ、コミュニケーションのために用いられます。音声学は、人間の音声を記述する科学です。

音声による言語の伝達には、主に3つの側面があります。それぞれ、調音音声学 (articulatory phonetics)、音響音声学 (acoustic phonetics) 及び聴覚音声学 (auditory phonetics) と呼ばれます。調音音声学とは、話し手がどのように発音器官を用いて音声を発するのかを研究する分野です。また、音響音声学は言語の音声を音波として捉え、物理的に研究する分野です。さらに、聴覚音声学とは、聞き手がどのように音波を知覚しているのかについて研究する分野です。

音声学と音韻論 (phonology) は混同されやすいですが、音韻論とは、諸言語の音声体系や組み合わせの法則を記述するものです。音声学では、音声の物理的側面に焦点を当てますが、音韻論では音声の機能に焦点を当て、抽象化を行います。

この音声学と音韻論の研究分野は、第2章と第3章で詳しく扱われています。

5.2 形態論

単語の構造を研究する学問です。

ユール (Yule 1985) によれば、形態論 (morphology) という述語は、もともと生物学で用いられていました。19世紀後半から、「形態論」という述語は言語学に取り入れられ、意味や文法的な機能を持つ最小の単位「形態素 (morpheme)」を分析し、単語の構造を研究する学問となりました。

例えば、英語の「pianists (ピアニスト)」という語を考えてみましょう。この言葉は、実は3つの形態素から成っています。まず「piano (ピアノ)」という基本的な意味を成す形態素が含まれ、もう1つは「-ist」、いわゆる「～する人」を意味する形態素があり、最後に文法的な機能(複数)を果たす形

態素「-s」が含まれます。

形態論の詳細については、第4章で説明します。

5.3 統語論、意味論、語用論

言語は数多くの単位から構成されています。文は、単語より大きく、談話やテキストより小さい単位です。統語論 (syntax) という言葉は、もともとギリシア語から由来したもので、「統合と配列 (syn「統合」+ tax「配列」)」という意味を表します。統語論は、言語形式の関係について研究し、文がどのような構造で成立しているかを扱う言語理論です。

言語形式の关系到焦点を当てる統語論に対して、意味論 (semantics) は、言語形式と世界に存在する実在物との関係について研究し、言葉の意味を正しく記述します。意味論は、語や文の意味だけではなく、テキストや談話などが持つ意味を研究する分野です。また、語用論 (pragmatics) は、言語形式と話者との関係について研究し、発話状況との関わりで、話し手が伝達しようとする意味がどのように成り立つかを解明します。語用論で扱われている分野として、直示 (deixis)、照応 (anaphora)、前提 (presupposition)、発話行為 (speech act) などがあります。

小泉 (1990) が指摘するように、意味論は言内の意味を研究し、語用論は言外の意味を研究します。言語学の研究では、意味論だけでは説明できないものがあります。例えば、「照応」現象を扱う際に、話し手と聞き手の知識状態を常に考慮に入れなければなりません。両者の知識状態に関する事柄は、意味論の領域ではなく、語用論の領域に属します。このため、意味論だけでは十分に「照応」現象を分析できず、必ず語用論を考慮に入れなければなりません。

統語論・意味論・語用論については、それぞれ第5章、第6章、第7章で具体的に論じます。

5.4 社会言語学

社会言語学 (sociolinguistics) とは、言語と社会の諸側面との関わりを扱い、社会における言語運用のあり方について研究する分野です。社会的な年齢差や社会地位の違いが、言葉の違いをもたらします。こうした年齢や社会地位、性別などに応じた局所的に異なる言語を社会方言 (social dialect) と呼びます。また、地理的な条件によって言語にも違いが見られます。これを地域方言

(regional dialect) と言います。社会言語学は、このような社会方言や地域方言を研究する分野になります。

同じ言語を話す集団は、言語共同体 (speech community) と言います。たとえ同じ言語を話しても、一人ひとりの言葉には違いがあります。このような個人レベルにおける言語のことを個人語 (idiolect) と言います。個人レベルのみならず、同じ言語を使う言語共同体同士にも、時間や場合によって違いが見られます。この違いをその言語における言語変種 (language variety) と呼びます。また、2 種類以上の言語変種が使い分けられていることをダイグロシア (diglossia) と呼びます。さらに、同じ話者が、その場の状況に応じて異なる言語変種を切り替えて使うことを、コード・スイッチング (code-switching) と呼びます。

例えば、シンガポールという社会は、英語と中国語のダイグロシア社会です。英語は公用語ですが、中国語は中国系の人々の共通語です。中国系の人々は、会社や学校など公的な場面では英語を使い、家庭など私的な場面では、中国語を使います。これがコード・スイッチングの一例です。

社会言語学の詳しい内容については、第 8 章を参照してください。

5.5 歴史・比較言語学と対照言語学

歴史言語学 (historical linguistics) は、言語の歴史的な変化及びその理由を研究する分野です。上述のように、現在、または過去のある時点で使用される言語を対象とする共時態の研究があり、これに対して、歴史言語学は通時態の研究になります。

中国語と日本語では、似た形式の語彙がたくさんあります。それは、中国語から日本語に語彙が借りられたからです。このような語彙を借用語 (loanword) と言います。また、もともと日本語の語頭には濁音と清音の区別がありませんでしたが、中国語からの借用語が原因でその区別が生じました。

比較言語学 (comparative linguistics) とは、歴史言語学の一分野で、親縁関係や同系性が推定される諸言語を比較することにより、同系性や親縁性を明らかにし、共通の祖語を再構築しようとする研究分野です。祖語 (proto-language) とは、比較言語学の基本的な概念です。関連性を持った複数の言語を、歴史的に遡っていくと、ある時点で一つの言語となりますが、その言語のことを祖語と言います。共通の祖語を持つ言語は共通の語族 (language family) に属しています。例えば、インド・ヨーロッパ語族には、

英語やドイツ語が含まれ、漢蔵語族には、文字どおり中国語やチベット語が含まれます。ちなみに、日本語の属する語族を日本語族と呼びますが、日本語には日本語と琉球語族しか属しておらず、他の言語との関係はまだ証明されていません。

歴史言語学と比較言語学の内容については、第9章で詳しく説明します。

また、対照言語学 (contrastive linguistics) とは、同じ時期における2つ以上の言語を比較・対照して、その共通点と相違点を明らかにしようとする分野です。「対照」と「比較」、この2つの言葉は、普段の日常生活では「比べる」という意味を表します。しかし、言語学では、全く異なる意味を表すことになります。上述のように、比較言語学は、歴史言語学の一分野で、同系性が推定される複数の言葉を研究し、その共通の祖語を再構築しようとする分野ですから、通時言語学に分類されます。一方、対照言語学は共時言語学に分類され、関連があるとは限らない複数の言語を比べて研究する分野です。例えば、日本語と中国語の共通点と相違点を研究する際に、その研究は「比較言語学」ではなく、「対照言語学」の研究となります。

対照言語学については、第10章で詳細に論じられています。

5.6 生成文法と認知言語学

生成文法 (generative grammar) と言えば、その提唱者のエイヴラム・ノーム・チョムスキー (Avram Noam Chomsky, 以下チョムスキーと略す) に言及しなければなりません。



エイヴラム・ノーム・チョムスキー (Avram Noam Chomsky, 1928 年～)